

第3分科会「次世代を育むジジとバアバの力」

コーディネーター：澤岡 詩野（公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員）

パネリスト：

桑原 静（シゴトラボ合同会社/BABAラボ代表）

竹内 俊晴（わくわく農園チーム・グランパ代表）

朝山 あつこ（特定非営利活動法人キーパーソン21代表理事）

実は、このテーマを決めましたときにも、検討会の中で、「ジジ」がいいのか、「ジジィ」がいいのか、「ジジ」がいいのか、どれだったら皆さんにとって当たりさわりのいい言葉なのか、どれだったら呼ばれてもいいんだろうねということが結構真剣に議論されました。その中で決定したのが「ジジとバアバ」になります。ですので、今日の分科会に参加していただいて、皆様がお帰りになられて、地域であったり、いろいろな場でこのお話をしてくださるときは、間違えずに「ジジとバアバの力」というふうに言っていたらと思います。



●人口構造の変化と家族の在り方

まずこの第3分科会、「次世代を育むジジとバアバの力」、このテーマ、なぜ私がそもそもこのテーマに関心を、まあ、皆さんと一緒に共有させていただきたいと感じたかといいますと、スライドをお願いできますでしょうか。私が、今、映っている、このパソコンのほうにスライドを切りかえていただけたらと思いますが、おそらく午前のセッションから参加をいただいた方は、こういったお話というのは、それから、おそらく今日御来場いただいている方の中には、既に地域でいろいろなことをやられている方が多いのかなと思っております。ですので、あえてこのあたりの数値を、全部羅列していますが、御説明させていただかなくても、皆さんのほうがよく知っているよという方もいらっしゃるのかなと思うんですが、まず、今の日本の社会、1つ大きく捉えますと、やはり人口構造が大きく変化している、それからもう1つ、家族がやはりあり方が異なってきたというのが挙げられるのかなと思います。人口構造の中でいいますと、2つの大きな数字、出生率と高齢化率というところが挙げられるかと思いますが、出生率に関しましても、今、1.42、これは昭和46年の2.14からしますとすごい落ち込み方ですね。今、国は、子供を、ある意味、生めよ増やせよみたいなことも言っていますが、なかなかそれがうまくいっていない。私、今、40になりますが、私自身、周囲の働いている女性を見ていまして、子供1人産んだはいいけど、2人目はもう無理という方が多いのが現状です。そういった中で、高齢化率、高齢の方々、65歳以上の方々がどんどん増えていく、さらには75歳以上の占める割合が、特に都市部のほうでは非常に顕著に高くなっていくというお話。

●独居高齢者と未婚率の増加

それからもう1つ、この下の四角になりますが、家族形態の変化もいろいろな言葉で語られています。例えばおひとり暮らしの高齢の方がどんどん増えていますねとか、それから若い世代のお話でも、生涯未婚率、これ、50歳時まで未婚の方という方になりますが、生涯未婚率は20年前の2倍、男性では20.1%とされています。ですので、今、50歳の生涯未婚の方、これが10年後、日本は団塊世代が後期高齢化していくとか、そういったことも言われていますが、生涯未婚の方々がどんどん高齢者になっていく、これも日本の1つの大きな課題かなとも言えると思います。

さらに、同居率の低下というところで、家族力がどんどん下がってきているねというお話、また、昔であれば、同居という住まい方は、お子さんと一緒にいて、1つ、心強いよねというお話によくなっていたかと思うんですが、今は、未婚のお子さんと、それも子供さんがまだ親に、どちらかという依存しているような、そんなような同居も増えてきているというふうな、大きくざっくりいろいろな数値を並べてみましても、日本の社会も、人のつながりのあり方が大きく変わってきているんだなということが得られます。

さらに、2014年80.2歳、これも、男性も0.2歳ぐらいまた延びたというお話がありますね。それから女性も、2014年、平均寿命86.6歳、これも0.2歳ぐらいまた延びたというところで、2060年には、何と男性は84.2歳、女性は90.9歳まで寿命が延びると言われています。ここで見ていただきたいのは、高齢の方が増える、寿命が延びた、単にそれだけではなくて、急激に、戦後すぐ、まあ、ちょっとたったぐらいのときには、男女ともに平均寿命は60歳前後でした。それが、この50年、60年の間に一気に20年ぐらい寿命が延びている。そこに人のつながりのあり方、地域社会のあり方、社会保障のあり方、夫婦のあり方、いろいろなことが追いついてきていない、そういう意味では、新たな人のつながり、地域社会のあり方を考えていかなければならない、今が過渡期なのかなど。我々は、今、これからこういった社会、どういうふうにして考えていけばいいのかを考えていく時代なのかなどというところですよ。

●地域崩壊

さらに、新聞紙上をにぎわせましたが、地方自治体、地域が消滅するというデータが出ています。これはどういうふうにとったデータかといいますと、子供さんを生む年齢の女性がどれぐらい減っているか、増えているかというところで消滅自治体の可能性というところ見たときに、今までは過疎の地域の課題と言われていた話が、実は豊島区とか足立区、杉並区は消滅自治体の候補に入っているということで、これは皆さん、かなりインパクトがあるデータだったのかなと思います。そこで、今、地域でつながる地域力を今からつくれるか、これが将来を左右する課題なのかなどというのが、まずは皆さんで共有していきたい大きな課題なのかなどと思います。例えば町内会、自治会がもう成り立たない、子ども会ですら成り立たない地域とか、それから都心の中でも限界集落と言われていたような地域、買い物にすら困っている高齢の方が出てきたりとか、孤独死というのも高齢者の方のお話と言われてはいますが、こういったお互いの顔を見知っていない社会では、若者が孤独死しているということも非常に大きな課題として挙げられたりもします。

こういった地域崩壊が招くものという中で言いますと、犯罪率の増加であったり、それからあとは、最近、悲しいお話で言いますと、児童虐待の増加というのもよく聞きますね。これ、あつた後に必ず聞きますのが、近所の方にインタビューをしますと、あそこのお子さんはいつも顔を腫らしておかしいと思ったのよとテロップが入りながら語る近所の方というのが出てきますけれども、それを見るたびに、何で気づいていて、そこに手を差し伸べてあげられなかったんだろうと、ちょっと悲しい気持ちになるニュースもすごく増えていたりもします。

●子育てをめぐる環境の変化

さらにもう1つ、虐待にまで至らなくても、最近、この言葉を皆さん御存じでしょうか。「子育て」というのは「子供」の「子」で「育て」というふうに書きますが、孤立して、お母さん一人で子育てをして、その結果、追い込まれて、どうしていいのかわからなくなって、虐待をしてしまうとか、育児放棄をしてしまう、ノイローゼになってしまう、そういったお母さんが増えている。それは、今までは生活苦のおうちのお話であると言われてはいたけれども、データをいろいろ調べてみますと、結構高学歴のお母さん、収入も恵まれているおうちのことだったりもしまして、こういった、地域、近所に何か起きたときに相談できるような人がいれば、もしかしたら何かが変わっていたのかもしれないという、子育てをめぐる環境の変化というのも挙げられます。

●子供の貧困－収入格差がもたらす影響

さらにもう1つ、今日お話を聞いていただく上で、皆さんの心にとどめていただけてお話を聞いていただきたい話の中に、子供の貧困の課題ということが挙げられます。これは先進国での貧困率ということが出ている数字ですが、最初に日本が貧困率ということ意識したときの新聞が、これは2009年の記事になります。ですので、また数値はちょっと変わってきているのかなと思うんですが、最初に政府がしっかり調べたデータが新聞などで出されたのが2008年、2009年ということで、今日はこの毎日新聞のデータを持ってこさせていただいています。日本は非常に豊かな国だと言われていますが、やはりこのデータが出たときに、日本中でみんながショックだったのは、日本というのは貧困、最近でありますと、富裕層とお金のないおうちのギャップが非常に広がっているというお話もありますが、これが如実にあらわれているのがこのデータのかなと。

そして、大人のおうちの家庭の事情が、それが実は子供さんが教育を受けられるかとか、そういった、子供が育つ環境の課題であったりもするということで、さらには、そういった子供の進学率などを見ていますと、高校すら出られないような子供というのも増えています。そういった中で、負の連鎖、貧困の連鎖という課題が日本の大きな課題になっているということで、このお話にも少し触れさせていただきました。

●彷徨う「おひとり様」

もう1つ、キーワードとして、「彷徨う『おひとり様』」と書かせていただいています。生涯未婚の方がどんどん増えている。それから、もう1つ、これは私自身の課題でもあるんですが、共働きで子供のいない夫婦の課題。20年後、定年退職した後、私たち、地域で絶対孤立しているよねと

子供がいないということは、地域に係わるきっかけが全くないまま年を重ねてしまう、そして退職した瞬間、夫婦2人で、または1人で、地域の中で完全に埋没してしまう、そういった方が、今、どんどん増えているというのも、1つ、地域をめぐる課題なのかなと言えます。

●地域コミュニティの本来の在り方

これだけの課題が山積みの地域、今、子育て支援ということで、お母さん同士でいろいろ助け合ったりとか、高齢者の孤立防止ということでサロン活動であったりとか、いろいろなアプローチがされています。でも、そこでちょっと残念なのが、1つの世代が1つの世代、高齢者が高齢者を、そして子育てをしているママたちが子育てをしているママといったところで、でも本当は地域って違いますね。いろいろな世代が住んでいて、いろいろな人がいるのが地域であって、障害を持っている人、持っていない人、若い人、若くない人、いろいろな人がいるのが地域で、それが本来は、お互いができることで支え合う、お互いができることでつながっているのが地域コミュニティの本来のあり方なのかなと。そういう中で、ですが、私の世代を考えてみましても、隣近所でおみその貸し借りをするとか、近所でちょっと見守り合うというのは、もう違和感のある世代です。

そういう意味では、今日、皆さんと一緒に考えさせていただきたいのは、他世代、特に子供をめぐる環境というのが悪化している、それからシニアの方々、それも知識・経験を持ったたくさんのアクティブシニアと言われていた方が地域にどんどん出てきている中で、この2つの世代がともにお互いに刺激し合って、新たな地域のつながり、地域コミュニティを作っていけば、日本はもっともっと明るい超高齢社会が来るのではないかと。

●地域をつなぐジジとババ

でもそのためには、多分、黙っていてもそんな循環は生まれまいねということで、仕組みと仕掛け、どんなことがあればそれがうまく回っていくのかな、そういったことも含めて、今日は地域ということ、あとはジジとババ、それから地域の子供、「孫育て」という言葉もはやっていますが、そういったアプローチをどう作っていくか、そういった循環をどう作っていくかということを、これはちょっと見づらい図ですが、これは、実は知人の世代間交流を研究しています東京都健康長寿医療センターの倉岡さんという方が提唱しているモデルですが、モデルといいましても、これは見ると当たり前のことです。

地域で、例えば「このまちの昔はね」と、一番左端に書いてあるところ、読み聞かせです。シニアの方々が地域の子供たちに、地域の歴史であったり、いろいろなことを読み聞かせをしています。そこで大きくなった次の円の先に来るのが、公園で遊んでいたりとすると、その地域のシニアがちょっと体を壊したりとかということで、そういった読み聞かせの活動から引いて椅子に座っています。ちょっとまったり時間を過ごしているところで、普通であったりすると、公園でおじいちゃんとおばあちゃんと子供世代が触れ合うというのは少なかったりするんですけども、昔、読み聞かせをしてくれたおじいちゃんだ、あ、あの子、たくましくなったな、何かお互いにちょっと交流が生まれる。その先に、この子供が大きくなります。そしておじいちゃん、おばあちゃん、ちょっと弱ってきたりもします、ジジ、ババ。

●地域次世代モデル

そのときに、いろいろな循環、子供、孫がどんどん大きくなって、今度は孫世代が地域のシニアにパソコンを教えたりとかというところで、何かいい循環がめぐられるのが地域なのかなと。こういう循環、「とぎれないつながりを力に『30年後の幸せタウン』」と書いてあるんですが、今の孫育て、今のジジ、ババが地域の子供さんたちを育てるということが、30年後のすてきな地域のあり方を作っていく、これがこのモデルになります。ですので、何かこういったモデルを生み出すための、結構時間はかかることだと思いますが、そのためにどうしたらいいのかなというようなことも含めて、今日は、先駆的な取組をされている御三方にお話をさせていただこうと思っております。私の前振りがちょっと長くなってしまいましたが、私、前座ですので、これからが本番になります。

今日は御三方ということで、竹内さん、桑原さん、朝山さんにお話をいただくんですが、今日は、それぞれ異なる、大きなアプローチは「次世代を育むジジとババの力」の循環を生むということで活動されているんですが、まず最初にお話しいただく竹内さんは、わくわく農園チーム・グランパ代表ということで、どちらかといいますと、地域の農業が趣味であったり、関心を持って、得意だというようなシニアが、その力を生かして、地域で農業、農ということをキーワードに、地域の孫育てをしているというアプローチになります。

そして、次にお話しいただきます桑原さんは、ちょっとタイプが違いまして、ビジネスという視点もしっかりと織り込まれて、地域で知識と経験をジジとババが生かして新たな働き方をつくり上げようというようなことを考えられているのが、この桑原さんになります。

最後にトリでお話しいただく朝山さんですが、朝山さん、いろいろな広い活動をされている中で、今日はこの部分をお話しいただきたいなということも1つお願いさせていただいていますのが、川崎で活動されているんですが、川崎の中でも、生活保護とか、なかなかうまく学習とか、そういったところにたどり着けない子供たち、そういった子供たちに、地域のシニアの力を生かして、そういった学習支援とかキャリア教育、そういったことをいろいろとやられているのが朝山さんになります。ですので、ちょっと異なるアプローチで、今日はこれからお話をいただこうと思っております。

【竹内】 ただいま御紹介いただきました、わくわく農園という学校農園をやっております竹内と申します。

●チーム・グランパー学校農園

では、御紹介に、チーム・グランパーという名前でございますけれども、これは、我々、仲間がおりまして、今現在でも、7人プラス奥さん2人を加えて9人でやっているんですが、この学校農園は7年前に発足いたしまして、地元の鳥が丘小学校という学校の専属農園でございます。生徒数、約650人。もちろん、今日の命題でありますように、まさしくジジとバァバの集まりでございます。

学校農園という定義は、これは横浜市環境創造局が行っている施策の中で、きちんと栽培収穫体験農園あるいは環境学習農園として位置づけて、助成制度がございます。この経過については、お手元に資料で事実関係を説明してございますので、話の中からは時間の都合で割愛させていただきます。

もともと私は、15年ほど前から、多少、趣味というものを中心に、農園をやりたい、野菜づくりをしたいということで、約70坪、家庭菜園にしてはちょっと広目の、普通の宅地を一生懸命畑地にかえるというところから、この農園、農業、あるいは野菜づくりに手を染めたというところからございまして、私はもともと電気エンジニアでございまして、それまで農業体験はゼロでございます。ただし、そういったいろいろなシナリオを作って、どうやったらうまくいくであろうかという発想は、これは技術屋であったって、農家であったって、どんなことをやっても同じということで、そう多く体験を積んだわけでもないんですけれども、そういう実感を持っております。もともと私も神奈川県下で活動を活発にしていますNPOの子供出前教室を盛んにやっているかながわ子ども教室、今日は関係者も見えておられますが、そこで子供たちの教育に関連もちょっと持っておりましたので、その発想の上で、子供たちに是非、今の、私が数年培ってきた野菜づくりについての、まあ、多少うんちくを含めて、関わりを持って一緒にやっていきたいなというふうに発想したわけでございます。

この作業というのは、確かに地道な、泥臭い、まさに土を相手ですから、自然を相手ですから、作業を続ける段階で、7年という、そんなに長い年月ではございませんけれども、経過を振り返ってみますと、大体3つのポイントがあったのではないかと考えております。

1つは、先ほどの経験豊富な面々が集まったというんですけれども、それは全く違ひまして、ほとんど素人が集まって始めました。その素人のジジ、バァバが思いを結集して、今の現在の活動をどうやって継続してきたかというプロセスを御説明したいと思っております。

もう1つは、相手が学校です。学校のこういう農園の事業の中でうまく活用するという発想が最初からうまくいったわけではございません。ですから、そういった学校を引っ張り込んで活動を、つまり我々と学校の連携を軌道に乗せるには時間がかかりました。その経過で何を私たちが学んだかということが2つ目のポイント。





わくわく農園 概要

チーム・グランパ代表 竹内俊晴

1、開設（第1期 平成21年度～25年度）

平成21年4月1日 横浜市栽培収穫体験農園として事業認可

2、開設趣旨

学校教育または福祉を目的として、野菜の栽培と収穫を行い、同時に農業に対する理解を深め、良好な緑地の保全にも寄与する。

3、対象農地

横浜市戸塚区鳥が丘79	903㎡	横浜市指定生産緑地 地元生産農家所有地
学校教育農園	573㎡	
団体系験農園	210㎡	
共用地	120㎡	

契約期間は1年間であるが、原則として5年間の継続を前提とする。

4、農園形態

「わくわく農園」は一体で整備、管理するが、利用区分は下記のように、複合型となっている。

(1) 学校教育農園

地元 横浜市立鳥が丘小学校の児童教育のため、栽培収穫体験農園として運営する。

(2) 団体系験農園

学校教育農園をサポートする要員の育成、研修を兼ねて、地元在住のシニア参加のチーム（チーム・グランパ）により運営する。

5、施設

水道、物置、休憩所（日陰棚）、ベンチ、農機具一式 など
なお 市環境創造局指定の農園看板を設置する。

6、経費予算及び決算

年間所要経費は、市よりの補助金とチームメンバーの参加費によりすべて賄う。学校の経費負担はゼロとする。

7、関係先

学校、チーム・グランパという当事者以外の関係先は下記の通り。
 ?横浜市環境創造局 南部農政事務所：指導監督窓口
 ?NPO 日本食品リサイクルネットワーク：リサイクル堆肥の無償提供
 ?横浜市グリーン事業協同組合 「緑のリサイクルプラント」：同上
 ?横浜市南部農業協同組合（メルカート）：営農アドバイザー

8、年間事業計画

毎年度初頭に 横浜市に対し年間事業計画を提出しており、予算案や作付計画書なども添付している。

9、運営状況

団体系験エリアにおいては、チーム・グランパのメンバーのそれぞれの要望に応じて、作物選定、栽培、収穫を行うが、農園全体として除草や環境整備ならびに管理をチーム全員が協力して実施する。

学校教育農園としては、その都度、学校側と協議して詳細は決めていくが、基本的には、学年1年生および2年生の「生活科」の科目授業として、農園で実習、観察などを行う。

その際の指導やサポートはチーム・グランパのメンバーが担当する。

近年は、農園が学校より徒歩7分の近いところに開設しているため、学校主催の授業参観や土曜参観等も農園で実施するようになってきた。

10、主な児童実習

4月	1年生のレンゲソウ摘み遊び(約300㎡のレンゲ畑)
5月	2年生による野菜苗、さつま芋苗植付け
6月	1年生 ジャガイロ掘り
7月	2年生 授業参観
8月	夏休み農園塾(参加者約20名、1～3年生が主体)
9月	秋野菜 苗育成
10月	秋野菜苗の植え付け(3～4種)、授業参観
11月	2年生 さつま芋掘り、料理教室
12月	各種野菜の収穫、観察
3月	学年末ありがとうパーティ

概略の年間日程は 上記の通りであるが、実際には観察実習は、臨機応変に先生方と相談しながら実施している。

11、給食食材

毎年 主要な作物は、給食食材として、必要量を学校に提供している。
 玉ねぎ、じゃがいも、カボチャ、さつま芋、キャベツ、白菜、ダイコンなど
 季節に応じて収穫される作物である。
 わくわく農園提供品は 給食室前に現物を展示して、全校生徒に知られるように配慮されている。

それから、子供たちが、この7年あまりの学校農園で何を学んだであろうかという点も、ちょっとかいつまんで説明したいと思っております。チーム・グランパというのは、先ほどちょっと前置きがありましたけれども、ちゃんとそういう助成制度がございますので、事業認可の申請をいたしまして、一応ちゃんとした目的と趣旨がありましたので、横浜市から直ちに認可を受けております。市としましても、あるいは、最初のスタートは約1,000平米、300坪、300坪というのは1反ですね、その助成制度からスタートしたのでございますが、一応地主にとっても、高齢化が進んで、なかなか手が回りかねる農地もあるんですね。そこが有効活用されるということは、お互いに互恵関係にあるということで、最初からその辺の障害はございませんでした。むしろ喜んで、市も、農家の地主も一緒になって協力してくれるという形ができたのが、いろいろ都市部においては幸いなことであつたらうと思っております。メンバーは、先ほど言いましたように10人以下のメンバーですけれども、食材に日ごろからちょっと関心を持っておられる料理教室のメンバーに声をかけました。だから、あつという間に10人近く集まったという背景がございます。

●自然とのかかわり方

最初は、農園をつくるというと、やっぱり家庭菜園の延長で考えますから、新鮮な野菜が身近で育てられて、それが家庭で消費できる、使えるということを期待するという素朴な動機が中心でしたけれども、実際やってみますと、300坪という大変です。10人でやってもなかなか大変です。しかし、その大変な作業をやりながら、私たちは、ただ収穫して食べて喜ぶということではなしに、野菜を育てるというプロセス、野菜も生きものですから、自然とのかかわりをじっくり理解しながら、育てることによって学ぶ、学んで、また勉強する、それが喜びにつながるということが循環し始めまして、大げさに言いますと、作物、つまり生物の生命力の大きさ、力強さ、そういったことを大いに体で体験でもって知ったということが非常に大きかったのではないかなと思います。単に野菜を育てるといって農耕技術ということになりますけれども、種まき、植えつけ、水やり、その他、肥料をどうやってやったらいいかということも、それをただ手順どおりに、決まったとおりにやるというのはだめなんですね。

もちろん自然相手ですから、今年あたりは非常に苦労しましたけれども、年々、天候を見ながら、折り合いをつけながら、いつ種をまき、いつ植えつけということは、やはりその都度違うと。ただそのとき大事なのは、ここは農業技術の講習ではございませんので省きますけれども、野菜たちの表情を見ようじゃないか、様子を見ようじゃないかと。それが水を欲しがっているのか、肥料を欲しがっているのか、それを見ながら、水をやったり、肥料をやったりということ。

●五感で確かめる

それから、それがまた1つ1つ作物によっても違うわけですね。乾燥を好む、あるいは水をどんどん欲しがる、作物によって全然違うので、相手をよく見ながらそういった作業をやるということも大きな学びの点でございました。ただ、その学ぶといっても、見ただけではだめなんですね。さわってみる、あるいは感覚的に、自然の中の生きものとしての見方がありますから、そういうのを、大げさに言うと五感でもって感じるというのが農家の本質ではないかと思ったぐらいでございます。あと、そういったことを生活の一部で一生懸命やればやるほど、私たちの得るもの、喜びが大きいということも、まさに体験でもって得た実感でございます。

それから、これは後で言いますけれども、650人の子供たちを相手に活動するということが、いかに我々シニアの、いわば力になるか、こういったことを、やってみて初めて、体でもって、極端に言いますと650人の孫がいるという感覚さえいたします。それから、メンバーですけれども、そういった喜びを共有し合ったということもありまして、7年間で、まあ、やむにやまれずというか、病気等で2人は欠けたりしましたけれども、また2人入ってきて、全くほぼ同じメンバーでやっておりますが、経費の負担は多少ありますけれども、それに余りあるものを得るということで仲よくやっております。中には自分たちの野菜を作って食べる喜びから、この数年間でそれまでの人生の一生分の野菜を食べたよというような、極端な喜びを語る方もおられます。

●学校農園の設立にあたって

これがチーム・グランパの私たちの実感ですけれども、学校との連携をどうやって進めたかということにちょっと触れさせていただきます。学校農園の存在意義、活用について、最初に申し上げましたけれども、最初から先生方の理解を得られたわけではないんです。やはり学校というのは、基本的に言うと、こう言うのは学校関係者に申し訳ないですけども、やっぱりちょっと保守的、あるいは用心深い、これは当然ですね。

ですから、この話を持ち込んだときも、徒歩7分の、そう遠い距離ではないんですけれども、授業で行くには遠い。あるいは、必ず問題児がいると。私たちも、低学年が中心ですから、低学年の場合は特にその問題児の扱いというのが、ある意味で、学校の先生方の悩み事、その不安があるということ。

それからもう1つ、これは、休耕地に近い農地を利用するために、学校の名前を大義名分として利用されているのではないかと、そういう、何と言いますか、被害者というような言い方ではないんですけれども、「そういったことで利用されるのもね」というようなことを先生方は言われた。

ただ、そういったことは最初にわかったのではなくて、つき合を長くしている間に漏れてきて、我々が知ったことです。そういった心配をいろいろされる先生というのは、私は別に悪く思いません。もっともなことだと思っています。そういう不安をしっかりと考えるということは、むしろ優秀な先生ではないかと思うんです。一番いけないのは無関心な先生です。その先生方にどうやって働きかけるかというのが私たちの初期の苦勞でした。

●食べてわかる、実感する

ですから私たちは、その先生方に極力負担をかけない形で、これを是非子供たちに教えたいなということから注意深く進めましたけれども、やっぱり何といても一番わかりやすいのは収穫体験です。ですから、1年生のジャガイモ掘り、2年生のサツマイモ掘り、それから続くキャベツとか白菜の収穫、わかりやすいです。ですから、そういうことから農園に親しみを持つというか、それから徐々に、その収穫物が、途中、どういう段階で成長し、たくましく育っていくかということを観察させる、これを授業で、クラスごとに交代で毎週のようにやるというプログラムを準備いたしました。

もう1つのポイントは、私たちも半端ではないものですから、そういう食材をたくさんつくります。キャベツなんかでも400株ぐらい、ジャガイモ、サツマイモは500キロ以上つくります。それを給食に提供するわけですね。給食に提供した場合に、やっぱり全校生徒が食べるわけですから、これはわくわく農園でできた作物だよと言うと、やっぱり受け方が違うというようなことで、徐々にそういったわくわく農園のかかわり方を増やしていったというのが経緯でございます。

●子供たちの感じ方が変わる

私たちがまず感じたのは、農園のそういう、いわば来たときの喜びなんかをどうやって感じてくれるかということなんですけれども、子供が一番早いです。先生方よりも何よりも、子供が一番素早く反応してくれました。これはうれしいことでした。2年生が、特に生活科という科目があるんですね。ですから、それまではプランターにちょっとしたトマトを植えるとかナスを植えるという程度でお茶を濁していたのが、しっかりした農園で作物が育つ姿というのは丸きり違うわけですね。ですから、それをしっかり子供がキャッチして、観察日記だとか、あるいはそのときのイメージを絵に描かせるということの、その表現が、農園と関わるようになったら全く変わってきたということとして、その変わってきたのを、今度は子供以上に先生方が違った視点で評価をし始めたわけですね、違ってきたと。絵が、これはフェイスブックに出したりもしているんですけれども、我々大人の発想を超えて、すばらしい、子供の感受性がもろに出てくる。例えばサツマイモの収穫をしますと、真ん中にいっぱいサツマイモをかくわけです。自分はちょっとそこで万歳をする格好をかくとかという、大人がかけない印象と絵を描きます。その影響というのは我々の想像以上のものがありまして、これは先生方が、ある意味、びっくりするまではいなくても、これは変わってきたという実感を持っていただいた1つの論拠だと思います。

それから、さっき給食に出す食材のことをお話ししましたけれども、給食に出された場合に、わくわく農園の作物だよと言うと、生徒の食べ方が違うそうです。それで、そのためには、低学年だけではなくて高学年もわかるように、給食調理室の前にキャベツならキャベツを展示して、今日はこれを使っているよ、これはわくわく農園よと、学校がちゃんと紹介してくれるようになった。これは大きかったと思います。

だんだんそういう形で、学校の先生方にも理解が深まると、自然ですけれども、積極的にこれを授業に活用すべきであるという、そういうことを提唱する、学校の先生方のリーダーが出てきたんですね。これは私たちのすごい味方になっているというか、ありがたいことだと思います。

●ボランティア協議会

ただもう1つ私が強調したいのは、その最大の後押しになったのは校長先生です。今から4年前に新任校長が来ました。それまでは、地域とのかかわり、あるいは地元の方との連携ということに対してあまり関心がなかった。それが、4年前に来た先生は、地域とともに学校をよくする、地域と一緒に連携して子供の教育の実をもっと高めるというか、充実させるという考えの持ち主で、それを強いリーダーシップで、学校の中で先生方に説いた、これが大きかったですね。

具体的に言いますと、ボランティア協議会を発足させた。それがうまく、みんなでよくしようという意思の確認ができたわけでしょうか、2年前から、一般的には敬遠されがちな、学校の学校運営協議会というのが発足しました。これはすごい権限があるものですから、中には教職員の人事に関して教育委員会に意見を述べるができるなんていうことがあるものですから、モンスターペアレントなんかが入ったら大変ですよ。今日はたまたま、その委員長もここに来ておられますけれども、まあ、それはともかくとしまして、そういうことができる学校になってきたと。それはやっぱり校長先生のリーダーシップが大きかったということは強調したいと思います。

もう1つ強い味方になってくださったのは、給食管理と食育担当教諭の存在です。この先生が非常に熱心で、我々のそういう活動を側面から非常に支援してございまして、さっき言った給食のレシピの問題、それからありがたいことに、年々、作物を提供する食材の料理からどういう給食のメニューになったということまで克明に記録をして、写真に撮って、そしてなおかつ、それに対する生徒の感想を寄せ書きにして、立派な1冊の年間レポートを作ってくださいました。これはすばらしい内容で、毎年1回、その贈呈を、ここ3年、受けておりますけれども、私たちの宝物です。よくぞここまで我々のことを認め、そして評価してくれているんだなど。ですから、我々もそれを見ると、ますますこれはしっかりやらなきゃという、いわば感謝の気持ちのやり取り、これが非常にまた大事だし、大きかったなと思います。

それから、だんだん定着するに従って、言ってみれば学校教育ということですが、一昨年からは授業参観、これは普通、学校の中でやりますね。保護者が来て授業を見てもらう。これを農園でやるようになったんです。子供たちもさることながら、それは日ごろ出入りしますが、お母さん方が初めて農園に来て、私たちの話を聞いて、子供たちが喜ぶ姿を見て、そしてお母さん方に対しても我々が野菜クイズを出したりして、一緒に勉強するというか、盛り上げようという形ができてきまして、それによってPTAの関係の方々も、わくわく農園という名前もさることながら、だんだん活動に対する理解を深めていってくださったと思います。PTAの会報なんかにもわくわく農園特集が出たりというようなこともしていただいております。